主日礼拝説教「真白な衣をいただき」

日本基督教団藤沢教会 2010年10月17日

1 主よ、あなたはわたしの神 わたしはあなたをさがめ 御名に感謝をささげます。あなたは驚くべき計画を成就された 遠い昔からの揺るぎない真実をもって。2 あなたは都を石塚とし 城壁のある町を瓦礫の山とし 異邦人の館を都から取り去られた。永久に都が建て直されることはないであろう。3 それゆえ、強い民もあなたを敬い 暴虐な国々の都でも人々はあなたを恐れる。4 まことに、あなたは弱い者の砦 苦難に遭う貧しい者の砦 豪雨を逃れる避け所 暑さを避ける陰となられる。暴虐な者の勢いは壁をたたき豪雨 5 乾ききった地の暑さのようだ。あなたは雲の陰が暑さを和らげるように 異邦人の騒ぎを鎮め 暴虐な者たちの歌声を低くされる。6 万軍の主はこの山で祝宴を聞き すべての民に良い肉と古い酒を供される。それは脂肪に富む良い肉とえり抜き酒。7 主はこの山で すべての民の顔を包んでいた布と すべての国を覆っていた布を滅ぼし 8 死を永久に滅ぼしてくださる。主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい 御自分の民の恥を 地上からぬぐい去ってくださる。これは主が語られたことである。9 その日には、人は言う。見よ、この方こそわたしたちの神。わたしたちは待ち望んでいた。この方がわたしたちを救ってくださる。この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。その救いを祝って喜び躍ろう。

1ザヤ書 25章1~9節

1 この後、わたしは大地の四隅に四人の天使が立っているのを見た。彼らは、大地の四隅から吹く風をしっかり押さえて、大地にも海にも、どんな木にも吹きつけないようにしていた。2 わたしはまた、もう一人の天使が生ける神の刻印を持って、太陽の出る方角から上って来るのを見た。この天使は、大地と海とを損なうことを許されている四人の天使に、大声で呼びかけて、3 こう言った。「我々が、神の僕たちの額に刻印を押してしまうまでは、大地も海も木も損なってはならない。」4 わたしは、刻印を押された人々の数を聞いた。それは十四万四千人で、イスラエルの子らの全部族の中から、刻印を押されていた。5 ユダ族の中から一万二千人が刻印を押され、ルベン族の中から一万二千人、ガド族の中から一万二千人、6 アシェル族の中から一万二千人、ナフタリ族の中から一万二千人、マナセ族の中から一万二千人、7 シメオン族の中から一万二千人、レビ族の中から一万二千人、イサカル族の中から一万二千人、8 ゼブルン族の中から一万二千人、ヨセフ族の中から一万二千人、ベニヤミン族の中から一万二千人が 刻印を押された。

9 この後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身につけ、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って、10 大声でこう叫んだ。「救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、小羊とのものである。」11 また、天使たちは皆、玉座、長老たち、そして四つの生き物を囲んで立っていたが、玉座の前にひれ伏し、神を礼拝して、12 こう言った。「アーメン。賛美、栄光、知恵、感謝、誉れ、力、威力が、世々限りなくわたしたちの神にありますように、アーメン。」13 すると、長老の一人がわたしに問いかけた。「この白い衣を着た者たちは、だれか。また、どこから来たのか。」14 そこで、わたしが、「わたしの主よ、それはあなたの方がご存じです」と答えると、長老はまた、わたしに言った。「彼らは大きな苦難を通して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。15 それゆえ、彼らは神の玉座の前にいて、昼も夜もその神殿で神に仕える。玉座に座っておられる方が、この者たちの上に幕屋を張る。16 彼らは、もはや飢えることも渇くこともなく、太陽も、どのような暑さも、彼らを襲うことはない。17 玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、命の水の泉へ導き、神が彼らの目から涙をことごとく ぬぐわれるからである。」

ヨハネの黙示録7章1~17節

本日朗読を聞きましたヨハネの黙示録は、聖書 66 巻の最後に置かれています。黙示録の中には、猛威をふるう獣にたとえられたローマ皇帝が出てまいります、この著者のヨハネは、ローマ皇帝ドミティアヌス帝(在位 81~96 年)の治下に起こったといわれる迫害のただ中にあります。当時、ヨハネが住んでいた小アジアの都市には少なからぬ数のキリスト信者がおり、ヨハネはその教会の指導者であったと言われています。ヨハネ自身が「わたしは、あなたがたの兄弟であり、共にイエスと結ばれて、その苦難、支配、忍耐にあずかっているヨハネである。わたしは、神の言葉とイエスの証しゆえに、パトモスと呼ばれる島にいた」(1:9)と記している通り、島流しに遭い、孤独な生活の中にあつてヨハネは自分が経験したことをアジア州にある 7 つの教会に宛てて証しし始めるのです。それはまた、私たちが今礼拝の中でこの書をひも解いているように、アジア州の教会の人たちの礼拝においてこの書が朗読され、聞かれるということを想定しています(1:1~3)。私たちが礼拝の中で語られるべき言葉のすべてが、この黙示録の中に記されていると言ってもよいと思います。ここには、神、そして小羊なるキリストへの讃美が響いています。

「アーメン。賛美、栄光、知恵、感謝、誉れ、力、威力が、世々限りなくわたしたちの神にありますように、アーメン」(7:12)。この頌栄句は、現在の讃美、私たちの今現在の礼拝、ということに留まらない、私たちの将来について語っているのです。「今を生きる」(カルペ・ディエム)ということが私たちにとっては、とても大切なことです。しかし、今だけでない、私たちの〈これから〉を聖書は語っていて、私たちはその方向を見て歩むことが示されているのです。私たちの〈これから〉とは、どのようなことでしょうか。私たちの 30 年後、50 年後ということならば、いかがでしょうか。先の教会懇談会でも、私たちはご一緒に教会のこれからの歩みに思いを馳せました。ところが一方で、私たちは、なかなかそれが思い描きにくいということもわかってきたように思います。私たちの教会は、「わたしたちのヴィジョン」(藤沢教会ヴァージョン)を懐に、「一人が一人をキリストのもとへ」という合言葉をもって歩んでいます。皆が伝道に遣わされる、皆が伝道のために祈りをささげていくという歩みです。その私たちの祈りが、教会建物に反映されるようにとさまざまな意見交換をして、共に絵を描いていくというプロセスにあつて、私たちはある飛躍を感じているのです。

私たちの現在は幸せなのだが、今のままではいけないのだろうか。否、たしかに、今のままでは不完全であるとしても、今の現実に立って将来を思い描くとはどういうことなのだろうか。現在と将来が結び付きにくい、想像しにくいと感じるところがあります。さまざまな心配事が頭をよぎります。この心配事が去らなければ、私たちの明るい将来は見えてこないのだと思われるのです。私たちの日々の色々な心配事に心を働かせることと、主の御心を尋ね求めながら大きな展望を見ることがどうつながるのか、このことはいつも私たちの課題であると言ってもよいと思います。私たちの目の前の心配事が、主の幻を見る目を塞いでしまうところがあるように思います。

さて、このところで私たちは与えられたヨハネの黙示録に聞きたいと思うのです。迫害が激さを増し、教会が厳しい状況にさらされているとき、ヨハネは、パトモス島にあつて、この現実を見つめるべくひとり黙想していました。すると、ある巻物が与えられます。その巻物には 7 つの封印がありました。「しかし、天にも地にも地の下にも、この巻物を開くことのできる者、見ることのできる者は、だれもいなかった」(5:3)と言います。7 つの封印を解くことがお出来になる方は、「小羊」と呼ばれるキリスト、

ただおひとりです。小羊なるキリストこそが封印を解かれるお方なのだとされるように、私たちのいただく御言葉もまた、ただ熱心に勉強するのではなくて、この方であれば開かれないものです。ヨハネは、その方の巻物の解き証しを見ている。その方は、ヨハネが見ている目の前で一つ一つの封印を解き、6つの封印を続けざまに解かれます(6章)。そこで啓き示されたことはしかし、地上に起こる人間の現実でありました。すなわち、戦争と流血、飢餓、病と死という、私たちの現実にも臨む艱難です。しかもこれらは、どれを取っても深刻な現実なのです。さらに続く封印が解かれると、天変地異とともに、宇宙を揺るがす大きな裁きが訪れるのだと告げられるのです。そして残る第七の封印が解かれる—それは8章ですが—、その出来事が起こる前に、ヨハネは幻を見るのです。

一つは、地上の場面(7:1~8)、もう一つは天上の場面(7:9~12)、本日の朗読を聞きましたヨハネが目にした幻です。この地上には、大地の広がりがあり、海の深みがあり、これらの世界の損なわれる前に、人々は救われなければならない、神のものとしての「刻印」が押されなければならないと言います。「刻印」(スラズ)とは、文字通り、しるしを刻むことです。古代世界では、主人の所有であることを示すために、人—多くの場合は奴隷—にはタトゥーが施され、動物には焼印が押されたと言われています。私たちの身にも、私たちが誰のものであるかを示す確かなしるしが刻まれる、このことは、パウロが「わたしは、イエスの焼き印を身に受けているのです」(ガラ 6:17)と言っている通りです。身体的にしるしを刻まれることというのは、比喩ではありませんけれども、初期のキリスト信者の間では、洗礼を受ける時にキリストを表わす文字や十字架のしるしを刻むということが実際に行われていたということも言われています(Dinkler)。いずれにしてもそれは、<クリスチャン>、<キリストのもの>となる洗礼の時に、付与されるしるしです。

次に、イスラエルの十二部族の名が呼ばれています。イスラエルの十二部族とは、イスラエルと呼ばれるヤコブの12の子らに与えられた名を持つ民族です。長男である「ルベン」ではなく「ユダ」がその冒頭にあるのは、「ユダ族から出た…ダビデのひこばえ」と呼ばれるキリストのゆえであります。しかし、ユダ族、ルベン族、…ベニヤミン族、12部族すべてから、同じ1万2千人の人々が出ると言われます。12の千倍です。「12」という数字は「7」と並んで、聖書において完全数とされていますが、その千倍です。つまり全ての人々、無数の人々、あの父祖アブラハムが神に言われた「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」「あなたの子孫はこのようになる。」(創 15:5)そのような数え切れない人々が、「14万人4千人」という数字には表わされています。イスラエルの全部族は、すべての教会を示します。主は、すべての教会で、人々の額にキリストのしるしが刻まれるまで待たれるということです。

そして今度は、白い衣を着、なつめやしの枝を持った、おびたしい人々の群れが見えます。この天上の場面で明らかにされるのは、民族や言語、文化を超えて主を礼拝する人々です。「この白い衣を着た者たちは、だれか」(13節)。「彼らは大きな苦難を通して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである」(14節)とあるように、彼らは殉教者の群れ、すなわち信仰を全うして、死んでいった人々です。私たちが、地上で失った人たちが、私たちの教会員名簿から取り去られた方々が、天上の名簿に移されているということは、彼らが天上で礼拝しているということなのだと、ヨハネは語るのです。私たちが失ったと思っていた愛する人たちが、天上で讃美をささげていると

言います。先主日から続いて、今週もまた私たちは、月曜日、火曜日、水曜日と愛する姉妹、そして兄弟の葬りを行います。私たちにはこの地上で多くの出会いが与えられます。私たちは、多く与えられているから、多く涙を流さねばなりません。多くの喪失を経験しなければなりません。与えられたものが、一つ一つ取り上げられていく、その涙の中で、私たちは幻を与えられるのです。この幻は、曖昧なつかみどころのないものではありません。私たちにはっきりと神のご意志を語るものです。「なぜ?」「どうして?」という私たちの嘆きを、「アーメン」という信仰に引き上げられるものです。神のご意志は、私たちの思いを超えており、損なわれることなく、必ず実現されます。私たちは、幻として与えられた神のご意志を聞いています。一つは現在、地上についての幻、もう一つは、天上についての幻であり、私たちの将来についての幻です。私たちは幻の中で、誰と一緒に礼拝しているのでしょうか。すでに召された信仰の先達でしょうか。まだ礼拝を知らない、私たちの家族でしょうか。大好きな友人でしょうか。

真白な衣を与えられた無数の人々の群れに、私たちが数えられています。真白な衣をいただく「洗礼」に、私たちは召されています。洗礼は、キリストのしるしを与えられることであり、それは<水>の出来事です。私たちが、身体のごれを<水>で洗い清めるように、確かに、その<水>は私たちが洗うのです。私たちは、<水>の中で罪に死にます。罪に死んで、新しい人に生きるようになります。私は、この「洗礼」の出来事を思うときに、よく思い起こす御言葉があります。「たとえ、おまえたちの罪が緋のようでも、雪のように白くすることができる。たとえ、紅のようであっても、羊の毛のようになることができる」(イザ 2:18)という御言葉です。この御言葉は、私たち人間の罪を指す時に、「黒」等の暗い色ではなく、「緋」や「紅」といった赤い色を示すのです。つまり、<血>の色です。私たちの罪が、<血>を流させているのです。私たちは、白い布を赤色に染めることはできません、赤色に染まっている布を、どうして白くすることができるのでしょうか! …できません。しかしキリストはおできになるのです。神が、「その衣を小羊の<血>で白くした」(7:14)と語られるのです。キリストが十字架で<血>を流された、その死に与り、そしてさらにキリストの復活の命に与るのだというこの約束が、私たちの「洗礼」において現実のこととなるからです。私の衣など絶対に白くなるはずがない、多くの方はそう思います。しかし私たちが白いのは、私たち自身が善人になるからとか徳が高くなるからとかということではなく、<キリストのもの>であるからです。キリストのものとして刻印をその身に帯びたなら、私たちは、新しい<クリスチャン>に出会うための伝道へと召し出されます。私たちがおぼえることのできる隣人もまた、同じ洗礼に召されているからです。

主イエスは、この地上を去られる時、ご自分の弟子たちの<これから>なすべきことをお示しになりました。「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子としなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことすべて守るように教えなさい」(マタ 28:19)。洗礼によって、地上では寄留者であり、旅人である私たちが永遠の住まいを得ます。聖書は証しています。「玉座に座っておられる方が、この者たちの上に幕屋を張る」(7:15)、別の翻訳では「彼らと共に住む」(フランシスコ会)と言われます。主が共に住んでくださる約束です。主が共に住んでくださるという約束が私たちに刻まれるゆえに、私たちの涙は止んで、泣いている私たちは、笑うようになるのです(ルカ 6:21)。私たちが召された者として、主に見え、主と共に住まう永遠の国を待ちつつ、またその御業に参与して共に急ぎつつ、この地上の命の歩みを歩んでまいりましょう。